

# Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.12 December 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
“皆丸い心で”  
／堀内みどり..... 1
- ・ 日本語教育と海外伝道 (17)  
日本語教育での教授法について④  
／大内泰夫..... 2
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (15)  
神との関係、社会との関係からテクノロジーとの関係へ  
／金子 昭..... 3
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (20)  
仏典翻訳の歴史とその変遷 ③  
／成田道広..... 4
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教への伝播— (7)  
2. コロンビアにおける日本人移民の話—その2  
／清水直太郎..... 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (52)  
弥生時代を再考する⑥「対海国」を巡る旅  
／桑原久男..... 6
- ・ ヴァチカン便り (41)  
31 度目の司牧の旅へ  
／山口英雄..... 7
- ・ 思案・試案・私案  
天大生の SDGs に関する意識調査③  
／佐藤孝則..... 8
- ・ 2019 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (5)  
第 5 講：71「あの雨の中を」  
／島田勝巳..... 9
- ・ おやさと研究所ニュース .....10  
天理ジェンダー・女性学研究室・関西環境教育学会共催ワークショップ報告 (金子珠理) / 日本宗教学会第 78 回学術大会で発表 (堀内みどり) / 第 325 回研究報告会 (ジャスティン・スタイン) / 「東アジア人文社会科学の新天地」シンポジウムに参加 (金子昭) / 第 326 回研究報告会 (金山元春) / 日本南アジア学会第 32 回全国大会に参加 (堀内みどり) / 教団付置研究所第 18 回年次大会に出席 (堀内みどり・金子昭) / 『グローカル天理』年間購読のご案内

## 巻頭言

### “皆丸い心で”

おやさと研究所主任 堀内みどり Midori Horiuchi

平成から令和へと移った 2019 年。国内では、5 月に天皇が譲位され、10 月 22 日にはその即位を国の内外へと宣明されました。11 月 9 日、組曲『Ray of Water (第 1 楽章海神、第 2 楽章虹の子ども、第 3 楽章 Journey of Harmony、岡田恵和作詞、菅野よう子作曲)』が、天皇即位を祝う国民祭典で披露されました。「令和」の持つ「Beautiful Harmony (美しい調和)」を想起しました。

同じ 9 日、ドイツ・ベルリンでは「ベルリンの壁崩壊 30 年」を記念する式典が行われました。メルケル首相は、「自由、民主主義、平等、法の支配、人権擁護といった価値観は自明のものではない。何度も息を吹き込み守っていかねばならない(『朝日新聞デジタル』11 月 9 日配信)」「もう二度と、壁で人々を分断してはならない。われわれはどんなに高く、頑丈な壁も打ち破ることができる(『産経新聞』11 月 10 日)」と語りました。

また、今秋日本で行われたラグビーのワールドカップは、人々に「ノーサイド」の精神を見せ、日本は「one team」のパフォーマンスを展開しました。多様な文化的背景をもつメンバーが、それぞれの能力をいかに発揮し、チームとしてプレーするために、どれほどの練習を積んだことでしょうか。世界中から多くのラグビーファンが来日しました。台風のために試合が中止になったカナダチームのボランティア活動も話題になりました。

一方で、度重なる水害や台風など自然の力にただ呆然とし、先が見えなくなるような出来事も少なくありませんでした。135「皆丸い心で」という教祖の言葉にそして、相次ぐ「親の子どもへの虐待」。「もうおねがい ゆるして ゆるして

ください」「あしたはもっともっとできるようにするから」頭から離れない言葉です。当時 5 歳(2018 年 3 月)だった結愛さんが、両親に宛て、ひらがなの練習をしていたというノートに書き残していたものでした。後に警視庁が全文を公開し、児童相談所の体制を拡充する法改正へとつながったといわれています。2019 年の裁判で事件は再び注目されました。今年 1 月に野田市で起きた事件は、親だけではなく、教育委員会の対応も問題になりました。

子どもたちが親から理不尽に扱われ、その結果「いのち」が奪われてしまいました。どうしてこのようなことが起きているのでしょうか。人間不信になってしまいそうな出来事です。学校の先生が同僚の先生を「虐め」で動画に撮る、赤ちゃんをエアガンの標的にする……近頃のニュースは、「人間」とは何ものかを問い詰めてきます。

私たちは、この世で生きて在るものです。さまざまなことが生起しつつある中で、メルケル首相が言うように、何度でも自由や平等・人権などの“息を吹き込み守って”いく覚悟が、共に生きて生かされるために必要だということなのだと感じます。

明治 16、17 年頃、久保小三郎が子供楯治郎の眼病をたすけていただいたお礼に、妻子とともにおぢばに帰ったとき、楯治郎が目に留めた葡萄の一房を手に取り、「世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで。」と仰せになった(『稿本天理教教祖伝逸話篇』135「皆丸い心で」という教祖の言葉にほっとし、そして人と人との「丸い心」を信じたいと思う年の終わりです。

## 日本語教育での教授法について ④

## 講義形式の授業で

2018年8月に天理大学より依頼があり、9月下旬から始まる日本語教員養成課程の「日本語教育入門」を担当した。急な依頼ではあったが、日本語教員養成に関しては普段から天理教青年会・婦人会海外人材派遣生の授業を行い、また日仏文化協会日本語教師養成講座の講師を担当したこともあり、「日本語教育入門」のシラバスも見て、充分に対応できるだろうと判断して引き受けることにした。またこの課程を修了した卒業生が筆者の勤める学校に来ることもあるので、何かとメリットもある。ただ登録者が56人いるとのことで、これほどの人数を相手にした授業は初めてでもあり、どのように進めようかと悩んだ。前回で「講義形式の授業」と「インタラクティブな授業」について書いたが、教員養成の授業で、大人数でもあり、この授業は講義形式の授業とならざるを得なかった。だが果たして、それで自分が伝えたいことが学生に伝わるのだろうかという思いもあった。

## 動機は何であれ

まず、初日の授業で教室へ行ってみて、やはり学生が多いという印象だった。後ろの出口付近に座っておしゃべりしている女子学生グループ、教卓の前に陣取っている留学生たち、どんな授業が始まるのだろうと筆者の顔を見ている学生。そんな中、Power Pointで作ったファイルをスクリーンに映し出し、ペンマイクを付け、自己紹介から始めたが、相変わらず私語も多く、前に陣取っている留学生たちは時々、後ろを振り返り、迷惑そうな顔をしていた。大学の授業というのはこんなものだろうか。大学全入時代と言われて久しいが、いろいろな学生がいるものだと感じた。普段、留学生の日本語クラスでも、青年会海外人材派遣生の研修クラスでも20人を超えることはないの、ちょっと勝手が違った。卒業後に日本語教育の道へ進みたいと思い、受講している学生もいれば、副専攻で何となく日本語教育に興味を持ち登録した学生もいることと思う。あるいは先輩から勧められ登録したという学生もいるだろう。学習動機が何であれ、とにかく興味を持って履修登録してこの教室に来てくれたことに謝辞を伝え、この授業の概要についても述べた。

## ノートは取らなくていい

「この授業では一切、ノートを取らないでください。」これには一瞬、驚いた学生もいたようだが、授業が終わった後でレジュメを渡すので、授業中は筆者の問いかけについてよく考え、そして、わからなければ隣の人と話してもかまわないから、ひたすら頭を使ってくれと指示した。そして「あとでマイクを持って皆さんのところを回りますから」と付け加えた。一般的に講義形式の授業では教卓のところに教員がいて「私語をやめなさい」「静かにしなさい」「しっかりノートを取りなさい、試験に出しますよ」となるのであろうが、逆のことばかりしているのだから、戸惑う学生がいたかもしれない。

しかし、「学ぶ」ということは“受身でやる”ものではないので、このクラスでは無理にでも主体的に参加できる環境を作ることの方が大事に思えた。日本語教育の専門用語や解説など

はあとで渡すレジュメを見て覚えればよい。まずは頭をフル回転させながら、興味を持って日本語教育というものに触れてほしかった。きっかけは何であれ、この授業に興味を持ち、日本語教育の世界のことを知りたいと思ったのであろうから、それに応えるのが教師の使命かとも思う。「留学生に対する日本語教育の授業」も、また「日本語教育に携わろうとする教員養成の授業」も、学習者が何かを「学ぶ」という点では変わらない。自分が「教育心理学」や「教授・学習過程論」で研究してきたことを活かして実践する場でもあると思った。

## クイズ番組の司会者のよう?

授業はすべてスクリーンに映し出し、Power Pointで図や画像もテキストもクリックする度に順次表示されるように設定し、だいたい5～10分おきに考えて答えるクイズ形式のテキストも入れておいた。話が抽象的になるので、具体的にを行った例を出すことにする。初日の「日本語教育と国語教育の違い」のところで、両者の共通点や相違点は何かと画面を見せてから、全員に問いかけた。「5分あげるから考えてみてください。一人で考えて答えが出なかつたら、隣の人と相談してもいいですよ。」そう伝えてから教卓を離れ、教室の中を歩き回り、時々、「目的や学習者や教材の面で違いはどうですか?」というようにヒントを出した。「はい、5分たちました。じゃあ、どうですか?」と、マイクを一人の学生に向けて、考えたことを答えてくれる。答えに躊躇している場合には「隣の人と相談したでしょう?間違っても連帯責任だから……」と“笑顔”で促すと、それなりに答えてくれる。教師が話している時に私語が止まらない学生もなぜか、他の学生が答える時には静かになる。「じゃあ、次の人、どうですか?」というようにランダムにマイクを向けながら、だいたい意見が出たところで教卓に戻り、Power Pointの画面を切り替えて、共通点や相違点について解説を行う。

自分たちが考えた答えと同じだと喜ぶ学生、他の学生の答えを聞いて、なるほどという顔をしている学生、反応は様々だが、自分の頭で考えた分、答えがどうなるのか知りたくて、「静かにしてください」と言わなくても興味を持って聞いてくれる。おしゃべりばかりしているグループにも「どうですか? 考えてくれましたか?」とマイクを向けると、それなりに考えたことを言ってくれる。

その後、同じ要領で母語や公用語の話、歴史的な話、国内で行われている第二言語としての日本語教育 (Japanese as a Second Language)、海外で行われている外国語としての日本語教育 (Japanese as a Foreign Language) の話につなげ、初日の授業を終えた。クイズ番組の司会者のようだと思うかもしれないが、考えることによって眠くならない、マイクを向けられるから適度な緊張感も生まれる。自分で考えてわからなければ友達と相談して答えを導くということで頭を使ったが、心地よい疲労感があり、勉強になったと言ってももらえれば成功だと筆者は考えている。毎回、授業後に出席カードに感想と授業内容について質問を書かせていたが、様々な感想や質問が出た。学生たちが授業を聞きながら考えてくれていたことは、次の授業への活力になったものである。

### 実存主義かマルクス主義か

第二次世界大戦後の日本の思想界では、実存主義が一種のブームになった。このブームは 1970 年代まで続いたが、その特徴はマルクス主義との関わりの中で実存が一つの“主義ism”として問題化されたことである。キルケゴール自身は人間の実存的あり方を強調したが、それが実存主義 existentialism であるとは一度も言わなかった。彼はどこまでもキリスト教との関わりにおいて、実存的主体としての人間存在を問い深めた。実存主義という言葉は、むしろサルトル Jean Paul Sartre (1905～1980) に帰せられるものである（戦前はもっぱら実存思想、実存哲学という言い方であった）。

戦後の実存主義ブームは若い世代を広範に巻き込んだ。キルケゴール、ハイデガー、ヤスパース、サルトルの邦訳著作集が陸続と刊行され、学生たちは争ってこれらを読んだ。1954 年には実存主義協会も設立された。とくに 60 年安保と言われる学生運動の時期には、「実存主義（主体性）か、マルクス主義（社会性）か」という「あれか、これか」がイデオロギー論争の焦点にもなった。ただし、この「あれか、これか」を先鋭化させたのはハンガリーの哲学者ルカーチ György Lukács (1885～1971) であって、サルトル自身はマルクス主義にヒューマンズムを導入する思想として実存主義を構想していた。

そのような実存主義ブームの中、キルケゴールは実存主義の元祖ということで喧伝されていた。その最盛期は、キルケゴール没後百年の節目にあたる 1955 年である。この年、法政大学を会場に「キルケゴール百年祭」が開催されたが、会場には実に 700 人を超える聴衆が詰めかけたという。

だが、現在の状況はどうであろうか。劇的な変化を示したのはマルクス主義の退潮である。すでに 70 年代には社会変革の思想としては魅力を失っていたが、1989 年のベルリンの壁崩壊、さらには 1991 年ソ連の崩壊により、国家の主導理念としてもこの思想は一挙に色褪せてしまった。そしてマルクス主義の退潮とともに、実存主義もまた思想の表舞台から退場を余儀なくされてしまったのである。

### 関係の中で問われる実存

こうしたことは実存思想のある特徴を示している。つまり、実存はそれだけで問われるというよりは、これと対立する何らかのものとの緊張関係にある時に、その意義と課題が出現するという性格を持つものなのである。キルケゴールの場合は、神との関わりにおいて単独者としての人間のあり方が強調され、キリスト教との緊張関係が問われてくる。サルトルの場合は、社会との関わりにおいて主体的な人間のあり方が強調され、マルクス主義との緊張関係が問われてくる。

そのように何らかのものとの関わりがなければ、実存は現実との足掛かりを喪失してしまうのである。実存とは、本来、主義主張でもなければ、哲学思想ですらない。むしろそれら以前の人間の様態を指す。すなわち、実存とは、ありのままの現実の人間の姿であり、私自身がこの現実の人間であることを自覚することなのである。その意味で、「覚存」という言葉のほう

が相応しいかもしれない（かつて覚存は existence の訳語として採用されたことがあったが、これは定着しなかった）。

実存という概念だけを取り出し、これを主義やイデオロギーにしてみたところで、それは全く抽象的なものになってしまうだろう。信仰や社会などのような緊張関係を持って迫る対立項がない限り、実存は思想的深化や現実的展開の手掛かりを見出せず、まるで土俵の中で独り相撲をしているばかりとなる。キリスト教に限らず、宗教との緊張関係がなければ実存も思想として限りなく浅薄化されるし、マルクス主義が魅力を失った途端、これとの対立項とされた実存主義もイデオロギーとして雲散霧消するのは、もつともなことなのである。

### 生命倫理において問われる実存

だが、近年になって、意外なところから、にわかに実存の問題が問われる場面が出てきた。それは生命に関わるテクノロジーの方面からである。私は私以外の何者でもないというのが実存の基本的観点であるが、移植医療はそのあり方を身体性の場面から変容させてしまう。それは、私の身体の一部を他者の身体の一部と入れ替わることによって、生身の人間のレベルで他者が自己の中に組み込まれることを意味する。

また、細胞クローン技術によって自分と同じ遺伝的特徴を持つ他者を産出したり、遺伝子操作技術によって遺伝子のレベルで人間を改造したりするならば、私という存在はいったい何者になるのだろうか。人間の遺伝子を組み込んだ動物の臓器を用いた異種移植が現実のものとなれば、人間と動物の境界線はどうなってしまうのだろうか。

そこで先鋭的に問われる実存は、身体的生命との関わりにおいての新たな問題性となっている。身体的生命は、文字通り生身の人間を成り立たせる基盤である。他者の臓器に対する拒否反応を抑えるために、臓器移植を受けた人が免疫抑制剤を飲み続けなければいけないというのは、身体的存在でもある人間の実存を考える上でも深い示唆を与えてくれるように思われる。

テクノロジーは日進月歩である。極端な話、AI（人工知能）の技術が飛躍的に進展すれば、将来、意識や感情を持つ AI も出現するかもしれない。そのような AI は確かに「覚存」であろうが、そもそも AI には生身の身体が全く欠落している。果たしてこれを実存と呼んでよいものであろうか。

これらの問題は今ではもはや、SF 的な空想物語として片付けてしまうことはできない。科学技術の進展に伴い、身体的存在としての人間のあり方が強調され、生命操作のテクノロジーとの緊張関係が問われてくる。それが今日という時代なのである。このテクノロジーは、難病治療に光明をもたらしてくれる一方で、対処の仕方を誤れば、人間改造という形でその身体的基盤を掘り崩してしまう恐れがある。

生命操作のテクノロジーとの関係は、19 世紀的な神との関係、20 世紀的な社会との関係と異なり、まさに 21 世紀的な意味での実存の課題であると言えよう。それは未知であり未開拓の領域における関係性の問いである。実存的生命倫理はようやく緒に就いたばかりなのである。

# 仏典翻訳の歴史とその変遷 ③

## 大乘の起源

釈迦の遺骨は、釈迦自身の指示により塚に納められ、人々はその供養を行うようになっていった。そしてその塚が仏塔として発展し、それに対する崇拜も広まっていった。上座部との関係が深いパーリ語文献である『島史』や『大史』によれば、スリランカでも古くから大きな仏塔が造営されていたことがわかっている。さらに中国からスリランカを訪れた法顕も仏塔を見たという記述を『法顕伝』に残している。したがって大乘だけでなく、もともとは上座部仏教でも仏塔の造営が行われ、崇拜されていたと考えられる。しかしながら、『大般涅槃経』に記された釈迦の指示を、遺骨崇拜に対する戒めであると解釈し、本来、仏塔崇拜は上座部の伝統ではないという主張がみられる。(平川, 1990: 272-289)

『大般涅槃経』の遺骨崇拜の禁止に関する釈迦の指示をあらためて確認すると—

「世尊よ、我等は如来の遺体に対して tathāgatassa sarīre どう処置したらよいでしょうか。「アーナンダよ、お前たちは如来の遺体の供養に tathāgatassa sarīrapujāya かかざらうな。お前たちは正しい目的のために努力せよ。」(下田, 1997: 98)

とあり、この部分は語彙の解釈によって異なる見解が導き出される。

実は tathāgatassa sarīrapujāya の sarīra の語義は、本来「身体」であり、これを「遺体」とするか「遺骨」とするかで解釈が異なる。さらに pujāya の語義を「供養」とするか「崇拜」とするかによっても解釈が異なる。つまり、この部分は「如来(釈迦)の遺体の供養」と「如来(釈迦)の遺骨の崇拜」と二通りの解釈が可能となる。ここで、釈迦の遺体の供養、つまり、釈迦の葬儀に関わることを釈迦は戒めていたのか、あるいは、釈迦の遺骨への崇拜行為を戒めていたのかという二つの解釈のどれを選択するかによって差異が生じる。その後の文脈においては、納棺や火葬など、釈迦の亡骸の処置に関する具体的な方法が詳細に示されており、一連の文脈は、釈迦の葬送儀礼に関する問答であったと解釈するのが自然であると思われる。つまり、釈迦は、自身の遺骨への崇拜を戒めたのではなく、出家者らが葬送儀礼に関わることを戒めていたのだと考えられる。

仏塔の出現はあくまでも釈迦の最後の言葉に由来しており、釈迦の存在そのものとも密接にかかわっている。その起源は釈迦自身の遺骨が納められた塚であったが、発展的に広まった仏塔は、涅槃の象徴として人々の崇拜を集めた。人々にとって仏塔は空間的には俗なる日常空間とは一線を画す聖なる領域で、釈迦の存在を体感する場であった。まさに仏塔は、釈迦の存在の永遠性を希求し、「生ける釈迦」を前提とする信仰を醸成する場になっていったと考えられる。

前回指摘した口伝から書写への教えの伝承方法の変化は、すでに社会に流布し諸々の活動を伴っていた釈迦の教えと彼の「ことば」を、純粹に書写テキストの内部へと封印すると同時に、テキストの中に新たな言語空間を構築する過程でもあった。匿名の經典製作者たちは、その言語空間にこそ真の教えが展開されると信じ、不断の經典製作運動に関わっていたのだろう。そしてそれは、空間的に聖域化された仏塔を中心とする信仰を、テキスト内部に聖域化された言語空間をもつ經典そのものへの信仰、つまり經典内部に釈迦の存在を確認する経巻信仰へと変

容させる過程でもあったのである。その結果、仏塔を建立し、經典を釈迦の遺骨と同様に納めて崇拜し、功德を積む信仰も次第に広まっていった。

その過程は、人間の身体を伴ってこの現実世界に存在した有限なる釈迦を、空間的・時間的束縛から解放し、永遠なる存在として飛躍させる試みであったといえよう。

実際、大乘經典が誕生した紀元前後は、釈迦の滅後 300～400 年にあたり、初期仏教の法滅思想 (saddharma-vipralopa)、つまり釈迦滅後 500 年で真の教えが消滅するという伝承からの危機感が次第に広まった時期でもあり、仏教存亡の危機が大乘經典誕生の原動力になったとも考えられている。(渡辺, 2011:74)

伝統的な釈迦の教えに依拠しつつも、その解釈に異論を唱え、敷衍的解釈から真の釈迦の教えを希求し再興させるという求道者の意識が大乘仏教の根底にあった。その意味において大乘仏教は、仏教史における原点回帰の運動としても捉えなおすことができる。

大乘教団の起源について、以前は、遺骨崇拜を戒めたという釈迦の教えを遵守する上座部と、それを奨励する大乘という構図をもとに、遺骨崇拜から発展した在家の仏塔崇拜のみと関連付けられることが多かった。しかし、上述の通り、上座部においても仏塔崇拜が行われていたと考えられるので、大乘教団の起源を在家の仏塔崇拜のみと関連付け、出家者で構成される伝統教団の外に置いて考える論拠は失われてしまうことになる。

インドの碑文において Mahāyāna (大乘) の名称がみられるのは 5 世紀以降であり、紀元前後に大乘經典が成立した後も、教団としての実態は把握しにくく、むしろ、上座部の部派とほとんど区別しにくいものであったと考えられる。グレゴリー・ショペンが「大乘仏教に関して確定的にいえることはごくわずかしかなければならない。(中略) 大乘は決して一つのものではなく、逆に複数のものの緩やかな束であった」(G.Schopen, 2004:492a 筆者訳) と指摘するように、大乘は、上座部と袂を分かち別の教団として発生したのではなく、起源的には大乘經典に基づく思想的傾向として出家者及び在家者に影響を及ぼし、上座部の様々な部派で研究対象とされる学派のような存在であったと思われる。

大乘仏教の起源から展開に至るまでの過程に注目すると、口伝の教えが成文化されることで、あらゆる文化的相違を克服し広く伝播することが可能となった様子が窺える。同時に、大乘經典創出の前提となった多様な解釈は、翻訳の許可性をも導き出す概念的基盤となり、大乘經典は西域の各言語や漢語に翻訳されることになった。特に漢訳仏典は中国における仏教受容の礎となっていった。そして漢訳の過程で中国において大乘の教理がさらに深遠化し、驚くべきことに、インドよりも早く中国において寺院や制度を伴う実体的な教団として大乘仏教が成立することになった(下田, 2011: 44)。さらに、その影響が中国人僧侶によってインドへ逆輸入され、インドにおける大乘仏教の確立に結び付いたのではないかと考えられる。大乘の教団史解明には、中国における仏教受容と漢訳仏典、そしてインドを訪れた中国人訳経僧の影響をも視野に入れる必要があるだろう。

[引用文献]

下田正弘「經典を創出する—大乘世界の出現」高崎直道監修『シリーズ大乘仏教 2 大乘仏教の誕生』春秋社、2011 年。

渡辺章悟「大乘仏典における法滅と授記の役割—般若經を中心として」高崎直道監修『シリーズ大乘仏教 2 大乘仏教の誕生』春秋社、2011 年。

平川彰『初期大乘仏教の研究 II』春秋社、1990 年。

G. Schopen, "Mahāyāna," R. Buswell (ed.) *Encyclopedia of Buddhism*, Macmillan Reference USA, 2004.

## 2. コロンビアにおける日本人移民の話—その2

天理教コロンビア出張所長  
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

前回(第6回)は、日本とコロンビア双方の政府が関与しているコロンビア南部地方(カウカ県及びバージェ・デル・カウカ県)へ移住した日本人移民の説明であった。最初に入植したカウカ県のコリント・ハグアル地区から、現在、日系人はバージェ・デル・カウカ県のバルミラ、フロリダ、そしてコロンビア



写真1 コロンビア

バージェ・デル・カウカ県、カリ市  
出典: [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/24/Colombia\\_-\\_Valle\\_del\\_Cauca\\_-\\_Santiago\\_de\\_Cali.svg/1137px-Colombia\\_-\\_Valle\\_del\\_Cauca\\_-\\_Santiago\\_de\\_Cali.svg.png](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/24/Colombia_-_Valle_del_Cauca_-_Santiago_de_Cali.svg/1137px-Colombia_-_Valle_del_Cauca_-_Santiago_de_Cali.svg.png)

第三の都市カリ市に定住している。  
約25年前(1994年頃)コロンビアには、もう一つの日系人社会が存在する、ということを知った。その時の情報は、1) 南部の日本人移民より歴史が古い、2) 日系人会があって、その会長が元プロサッカー選手であり、コロンビアで初めての日系人選手であったこと程度であった。「ネット情報」も無かったため、私は無性に調査したくなり、自ら現地へ赴いた。調査方法は、日本人移民へのインタビュー形式による。以下は、その「コロンビア北部の日本人移民」(バランキージャの日系人)の調査内容の要旨である。

### 2.2 コロンビア北部の日本移民

コロンビアの北部とは、カリブ海(大西洋)側の地域を指す。主要な都市は3都市、カルタヘナ、バランキージャ、そしてサント・マルタである。その中で、日本人移民の舞台となるのが



写真2 コロンビア

アトランティコ県のバランキージャ市  
出典: [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/f/f0/Colombia\\_-\\_Atlántico\\_-\\_Barranquilla.svg/1920px-Colombia\\_-\\_Atlántico\\_-\\_Barranquilla.svg.png](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/f/f0/Colombia_-_Atlántico_-_Barranquilla.svg/1920px-Colombia_-_Atlántico_-_Barranquilla.svg.png)

バランキージャである。バランキージャはアトランティコ県の県庁所在地で、人口170~180万人、コロンビアの第四の都市である。  
このバランキージャへ日本人の移住は、計画されたものではなく、またまとまったグループが住み着いた、というのではない、きわめて偶然なケースである。しかしながら、移民のいくつかのケースの中で、このバランキージャの場合は日本人移住の一つの「形」と考えられ、日本人が「現地に同化」という要素がかなり濃くでているケースである。また、コロンビア南部移民の時代よりも、10~15年ほど以前からの歴史であることを考慮に入れる必要がある。

### \*日本人が入植した経緯<sup>(1)</sup>

「水野」という苗字を名乗る一人のペルー移民の日本人がパナマを旅していた。当時ペルーに蔓延していたコレラから逃れるため、一時疎開するという目的があったからである。しかしながら、水野氏はすでにコレラの保菌者であり、パナマで発症した。水野氏は「コロンビアのアトランティコ県付近に病気に効く薬用水がある」ことを聞いていたので、1915年その水を求めて、プエルト・コロンビア港に到着した。事実、ウシアクリという先住民の村が存在していて、そこには療養施設が設けられるほど、「薬用水」で当時は知られていた。水野氏もそこで療養して次第に健康になった。水野氏は、健康が回復したらパナマに戻ろうと考えていた。けれどもその村、ウシアクリの環境が気に入り、結局ここに定住し、そこで一人のコロンビア人女性と結婚した。

それより前の話だが、水野氏がパナマに滞在していた時、彼は理容師として生計を立てていた。彼は、彼の生まれ故郷にいる2人の友人に「パナマに来ないか、理容師で成功する」という手紙を送った。その友人というのは道工氏と安達氏だった。彼ら2人は水野氏の言葉を信じ、日本からパナマに渡った。しかし、彼らがパナマに到着した時にはすでに水野氏はコロンビアのウシアクリに行った後だった。そこで、2人は少しの間パナマで暮らし、その後、水野氏を探しにウシアクリに移った。この3人がコロンビア北部の日本人移民の最初である。このウシアクリの「薬用水」の話は有名になり、パナマやペルー、キューバに移住している日本人たちが次第にその水を求めて来るようになった。

その結果、バランキージャとウシアクリに13人の日本人が来て、結婚して家庭を築くようになった。1927年までにウシアクリにいた数家族はバランキージャに引っ越して、1930年までには少なくとも13人の日本人及びその配偶者や家族がいたことになる。コロンビア南部の日系人到着が1929年11月と比較しても10年以上も早い入植になる。

### \*コロンビア北部日系人の特徴

コロンビア南部の日本人移民と異なるのは、バランキージャへ移住した日本人はほとんど独身男性だった。そしてすべての男性日本人はコロンビア人女性と結婚した。さらに、彼らはコロンビア日本大使館はもとより、コロンビア政府とも何ら関係を持たなかった。彼らは南部日系人のように政府からの援助や計画は無く、自分たちの生活、人生は自分たちで支え、築き上げた。彼らは、日本人ならではの「器用さ」を発揮したのである。それは、写真技師、食料品販売、そして前述のように理容師などであった。

コロンビア南部移民のように、農業日本人会(SAJA:一種の協同組合)も設立されなかったバランキージャの日系人だが、彼らは毎月会合し、日本人という自覚に基づいた友情を育てた。そのため、バランキージャの初期の移民は国籍を変えなかったのである。

[註]

(1) 清水直太郎 1994年7月 Sondeo クラスの期末レポートより; 回答者: 道工薫

## 弥生時代を再考する ⑥「対海国」を巡る旅

天理大学文学部教授  
桑原 久男 Hisao Kuwabara

11月2日～3日、「対海国を巡る旅」と題し、各地から集まった有志8名と連れだって、玄界灘に浮かぶ対馬を訪問した。前日の1日夜、博多港を夜10時30分出発のフェリーに乗り込んで、6時間ほど波に揺られ、翌朝4時半に対馬市北部、上対馬町の比田勝港に到着する。まだ周囲は真っ暗だが、釣竿を抱えたグループなどはみな下船して散り散りになってゆく。我々の一行は、船内で夜が明けのを待ち、港に手配してあったレンタカーに乗り込み、島内の遺跡巡りを開始する。今回の現地視察には、現地での手配や資料の作成を行った常松幹雄さん（福岡市埋蔵文化財課）のほか、弥生時代の青銅器を研究する吉田広さん（愛媛大学）、地元出身の考古学者、俵寛司さん（九州大学大学院・東洋大学）が同行しているの、対馬の遺跡を見学し、青銅器などの出土資料の検討を行うには万全の態勢だ。

港の脇にある「網代の漣痕」は、黒灰色の泥岩と砂岩の互層が波に洗われて、独特の海岸地形を形成している場所で、ここでは対馬の基本的な地質と地形を知ることができる。ここに限らず対馬の地形で印象的なのは、「土地は山陰しく深林多し。道路は禽鹿の径の如し」、「良田無く、海物を食し自活す」という『魏志倭人伝』による「対海国」（対馬国）の描写どおりに、全島にわたって、緑深い山々と紺碧の海が平野を挟むことなく直結することだ。昔も今も変わりなく、限られた幾つかの平野に寄り添って人々が住み着いているようで、『魏志倭人伝』では「千余戸有り」と記されている。



写真1 塔の首遺跡の解説板

次の訪問地、塔の首遺跡は、港のある入り江を見下ろす尾根の突端に営まれた弥生時代後期（紀元1～2世紀）の墳墓群で、板石を組み合わせた「箱式石棺」から、青銅製の広形銅矛が副葬品として出土したことで知られている。広形銅矛とは、弥生時代の中で独自に発達した青銅器の一種で、銅矛が武器としての実用性を失って極度に大型化したものだ。対馬では、福岡平野で生産されたこのような広形銅矛が、銅鐸の場合と同じように丘陵上に複数個が埋納されたり、あるいは墳墓の副葬品の形で出土したり、大量に見つかっている。塔の首遺跡では、広形銅矛が韓国の無文土器と北九州の弥生土器とともに出土したのが特徴的で、これもまた、「船に乗り、南北に羅す」という『魏志倭人伝』の記述を彷彿とさせる。

レンタカーは、もう一カ所、経ノ隈墳墓を訪れたあと、上県町に入って海岸線沿いを進み、「異国の見える丘展望所」で駐車する。ここから朝鮮半島までは、直線距離で約50km。『魏志倭人伝』には、朝鮮半島南部の「狗邪韓国」を経て、「始めて一海を度る。千余里。対海国に至る」とある。眼前には、その「一海」の光景が広がり、天気によければ、朝鮮半島南岸の

山々を遠望することができる。絶景を前にして、写真を撮影するためにスマホを取り出して驚いたのは、日本国内の電波より、韓国からの電波の方がここでは強く、韓国に滞在していると誤認したキャリアから「海外パケット放題」の案内が届いたことだ。韓国との距離の近さを再認識しながら、慌ててスマホを機内モードに切り替えたことは言うまでもない。

上県町ではさらに、白嶽古墳群、志多留貝塚、大将軍山古墳を見学しながら、峰町へと南下し、三根遺跡、井手遺跡、峰町歴史民俗資料館、タカマツノダン遺跡、大田原丘遺跡を視察し、さらに南に進んだ豊玉町では、唐崎遺跡、シゲノダン遺跡を訪問する。いずれも弥生・古墳時代における対馬と朝鮮半島、北部九州との密接な交流を物語る遺跡ばかりだ。昼食後、美津島町の黒瀬では、区長さんのご厚意で、地元の神社に伝わる広型銅矛7点の実物資料をつぶさに観察させていただくことができ、大型化した青銅祭器の存在感にただ圧倒されるほかなかった。弥生時代の対馬の人々は、交易で得た富をこのような青銅祭器を入手することに投入していたのだろうか。黒瀬地区の入り江を挟んだ対岸の山上にあるのが、古代の山城として知られる「金田城」で、船で渡ればすぐなのだが、今回は、レンタカーで入り江を回り、山麓の駐車場から歩いて山頂をめざした。1時間ほどの登山の後、山頂からの眺望を楽しみ、1日目の行程は終了となった。美津島町内の民宿に宿泊し、2日目は、万関橋、西漕手、和多都美神社、烏帽子岳展望所、豊玉町郷土館、出居塚古墳、根曾古墳群などのスポットを巡る。最後は厳原町で矢立山古墳群を見学し、厳原港を午後3時半出発のフェリーに乗船。慌ただしいながらも濃密で充実した対馬訪問となった。



写真2 金田城からの眺望

さて、筆者が前に対馬を訪問したのは、1994年夏だったから、今からちょうど25年前のことになる。その頃の島内は、厳原町・美津島町・豊玉町・峰町・上県町・上対馬町の6町に分かれていたのが、2004年、6町が合併して対馬市となり、市役所を厳原に置いた。その際の人口は約41,000人だったのが、現在は、約3万人まで減少しているという。しかし近年は、観光振興に力を入れ、2000年代から韓国人観光客が右肩上がりに増加し、昨年は、対馬を訪れた観光客約53万人のうち、約41万人が韓国人だったという。今回の訪問でも、韓国人観光客が訪れそうな場所には日本語に加えてハングルの表記が当たり前になされていたが、韓国人の団体を目撃したのは1回だけだった。「過去最悪の日韓関係」のあおりで、9月以降、韓国人観光客が対前年比9割減となっているのだという。国際的な政治情勢が人々の交流や交通ルートに影響を及ぼすのは古今東西にしばしば見られる現象、と言ってしまえばそれまでだが、何とかならないものだろうか。

## 司牧の旅

ローマ法王フランシスコは、2019年9月4日から10日まで、31度目の司牧の旅を実施した。今回はアフリカのモザンビーク、マダガスカル、マウリティウスと回ったが、アフリカは今回で4度目だ。モザンビークの首都近郊の町ツインベートで行われたミサでは、「暴力」「報復」「投棄」を非難し、これらが「いかなる家族」「近隣グループ」「いかなる民族」さらには「一国家」にも未来をもたらさないと述べた。

法王はとくに若い世代の行動を鼓舞した。「腐敗」は、すべての社会層を裕福にしようとする国の発展を阻害することである。貧困者に近づき、協調すること、とりわけ宗教者は足を地につけ、活動することだと述べた。なお、法王は平和のシンボルの木、バオバブの植樹をした。

法王は9月6日、ツインベート病院を訪問し、挨拶の中で次のように述べた。この病院はローマの聖エジディオ共同体が経営している。

「私は、女性や子供のエイズ患者に際しての、あなたがたの専門的知識、職業倫理、病人を癒す愛、歓迎する愛を見るにつけ、『聖書』の『良きサマリア人』の例え話を思い出す。あなたがたは、『この病気には勝てない』と匙を投げ出さず、正しく勇気を持って解決しようと対処されている。主は、道端で暮らす人間と共にいるように、このホームで暮らす人々の傍にもいる。がん患者、結核患者、若者や子供の栄養失調の叫びを聞いてもらいたい。地方の病院を活性化するために、貴重な協力を提供する各種専門家の無償で自発的な行為は、人間性と福音の大きな価値を含んでいる。」

## シノド会議

1965年法王パオロ6世によって提唱された南米のシノド会議は、枢機卿会議に次いで、法王にとって大切なものになっている。現法王にとっても気候変動は「家族」「若者」について3番目の大きな議題である。本年のシノド会議は10月6日より27日まで開かれた。参加者の内訳は28人の枢機卿、29人の大司教、62人の関係市町村の司教、44人の一般司教、21人の宗教者からなり、合計184人（そのうち113人が汎アマゾン地区出身者）。一般市民からは、スリナムより3人、ヴェネズエラより6人、コロンビアより13人、エクアドルより7人、ブラジルより57人、ペルーより10人、その他の地区より6人である。一般市民の中には17人の土着住民の代表者がいる。そのうち女性は9人である。出席者全体だと女性の数は35人となる。しかし、教会の重要問題については、慣例により、投票の権利はない。

シノド会議の中心は「気候変動問題」である。新枢機卿のクゼルニー氏は、イエズス会の月刊誌『チヴィルター・カトリカ』に次のように記している。アマゾンは780万平米に3,300万人が住む。300万人は390の異なる種族やグループで構成されている。ここには恐ろしいことはたくさんある。例えば、「活動家の殺人」「横領事件」「水資源を含む自然財産の私有化」「不法もしくは合法的な森林開発」「鉱物や石油の試掘」「汚染と疾

病」「人間の密貿易」「先住民族の文化の消滅」「増加する貧困」である。

アマゾンは広大な森林地帯であるが、毎年かなりの自然火災が発生して、森林面積が縮小している。本年はその火災がとりわけ数多く発生し、その被害は倍増した。アマゾンの森林地帯は青い地球の象徴であり、酸素を供給する宝庫である。しかし、ブラジル政府にとっては、森林開発は、国を発展させるものである。そのため、森林を伐採し、土地を開発し、工場を建設し、国力を増進しようとする。アマゾンの現状を守るために、EUはブラジル政府に経済的援助を申し出たが、ブラジル政府は返事を保留したことは周知の事実だ。スウェーデンの16歳の少女グレタ・トゥンベリの発意によって、地球上の若者が地球を救うために、また将来の生活を守るために全世界でデモを展開している。

## ズッピ氏は枢機卿に

イタリア・ボローニャの大司教を務めているズッピ氏は、ローマ出身で64歳。この度新たに13人の枢機卿が誕生したが、彼は唯一のイタリア人だ。氏は、聖エジディオ共同体の創始者アンドレア・リッカルドと知り合い、その共同体に入会。1955年10月11日生まれで、大学生の時に聖職者になる決意をする。司教になったのは1981年。貧民救済のために活動を続け、クリスマスにはローマの由緒ある教会・聖母マリア・トラステーベレで、ミサを司式したこともある。1992年には、モザンビークの内乱時に、政府軍と反乱軍の仲介に奔走し、両者の仲介のために活躍し、その和解条約の成立に寄与した。2015年には、現法王よりボローニャの大司教に任命される。そして今回の枢機卿就任である。これはカソリックの中でも非常に早い昇進である。大司教は、貧しい人に寄り添い、その人々を救済するという活動を続けている。夜は街頭に出て、家なき人々や食に欠く人々の救済に努めてきたのである。

ズッピの家系で枢機卿が出たのは、彼で2人目だ。初めての人はカルロ・コンファロニエリと言って、氏の母の叔父にあたる。彼はアンブロシウス会に所属し、信仰信念はかなり厳しかった。カソリックの信仰信念を持ち、真のローマカソリックの信者として行動していた。

今回の13人の枢機卿の誕生で、新法王を選出するコンクラーベで投票権を持つ者は、80歳以下で10人を数える。現法王の在任期間中の枢機卿任命は今回で、投票権のある枢機卿が67人となった。現在投票権を持っているのは枢機卿の80歳以下の128人だから、現法王の息のかかった枢機卿が半数を超えたのだ。ちなみに、前法王ベネディクト16世が任命した存命中の者が43人、前々法王ヨハネ・パオロ2世が任命した中では、18人が存命である。ヨハネ・パオロ2世、ベネディクト16世、フランチェスコとイタリア人以外の法王が三代続き、イタリア人の枢機卿は減る傾向にある。そのため、今後イタリア人が法王として選ばれる確率は次第に縮小している。

2015年9月、国連は、新たな目標として採択した「SDGs（持続可能な開発目標）」に、17の目標を設定した。日本としても、さまざまな団体、組織、個人がそれぞれの立場の中で取り組みを始めている。

私は、今年度担当する「地球環境論」の春学期授業の中で、さまざまな自治体、企業、大学などが「SDGs」に基づいて取り組む事例を紹介してきた。そして、期末テストの一つの設問として、「天理大学として『SDGs』を実践するには、どのような方法・内容が考えられるか？ 具体的な事例をあげて説明しなさい」という課題を出した。

受講生263名から、複数回答可という条件で得られた回答数は、合計673項目（事例）数だった。そのうち、17の目標内容とは少し異なる意見として、169項目（全項目の25.1%）の回答を得た。少し異なるとはいえ、これらの項目は、むしろ天理大学に特化した、言い換えれば、天理大学の「建学の精神」に則った独自の「SDGs」ともいえる回答だった。

そこで、前号では、得られた169項目を新たに7つの“目標”に区分し、それぞれの項目数について列挙したが、本号では、それぞれの項目内容について、以下に具体的内容を示す。

天理大学は、「建学の精神」として「宗教性」、「国際性」、「貢献性」の三つの柱を置いている。分析に供した7つの“目標”の一つ、「建学の精神に基づく三つの柱」に関しては、169項目のうち11項目が該当した。ちなみに、この項目を回答した受講生は、全員が1年次生だった。このことは、入学して間もない1年次生が、「SDGs」の根底に「建学の精神」をはっきりと意識し、心の中に納めていたことを表している。

平成13年1月26日（天理教では「春季大祭」の日）、インド西部グジャラート州でM7.9の巨大地震が起きた。天理大学は、教職員・学生による被災者への救済、寄り添い、復興を目的とした「国際参加プロジェクト」を立ち上げた。これを契機に、このプロジェクトは毎年続けられることになった。この“目標”「国際貢献・国際参加プロジェクト」を事例に挙げた受講生は51名（項目数）で、この項目数は7つの“目標”の中で最も多かった。このプロジェクトも、「他者への献身」を目的とした継続企画であり、「国際性」、「貢献性」を全面に打ち出した「建学の精神」の実践例である。

また、天理大学は二つの重要な「宣言」を発表している。一つは、平成24年4月23日（創立記念日）に発表した「天理大学エコキャンパス宣言」である。奈良県内の大学では初の「宣言」である。趣旨に、「地球環境問題の重要性を認識し、環境保全に配慮した教育・研究の充実を図るとともに、緑あふれるキャンパス内の自然環境を大切に、ものを大切にす心の涵養とその実践に努めます」とある。また続けて、「建学の精神に基づく『貢献性』、すなわち他者への献身を行動の指針に掲げ、そのためのひのきしん（ボランティア活動）を学生と教職員が『一手一つ』になって推進することをめざします」とも記されている。この“目標”「エコキャンパス宣言」の実践を具体的

事例として挙げたのは2名（項目数）だった。ちなみにその2名は、2回生以上の受講生だった。

もう一つは、平成25年10月10日に発表した「天理大学スポーツ宣言」である。この宣言は、「天理スピリットに基づき、共に助け合い、他者の幸せのために貢献する優れたスポーツ人の養成に全力で取り組む」ことを目的とし、五つの行動方針を具体的に示した。その方針の中に、「2. 謙虚さをもって多くを学び、みずから律する強さをもち、天理スピリットを体現する優れたスポーツ人養成のため尽力します」と、「4. 専門的知識や技術をもとに個性を生かした指導をおこない、みずから率先して行動し、チーム力を高める魅力的なスポーツリーダーを育成します」の二つが含まれている。このように、「他者への献身」を基本にした「天理スピリット」と「魅力的なスポーツリーダーの育成」を実践例とする、“目標”「スポーツの普及と指導」を挙げたのは36名（項目数）だった。ちなみに36名は、学年に関わらない、運動部所属の学生がほとんどだった。

その他の回答には、天理大学は社会との関わりを積極的に推し進めてはどうか、という内容も多かった。たとえば、大学の敷地内に農作業ができる畑を造成し、そこで野菜などを栽培してはどうか。収穫した農産物は学内の食堂へ提供し、余剰分は地域で販売する。いわゆる「地産地消」を実践してはどうかという提言である。また畑の農作業や食堂での調理作業には学生も交代で加わるなど、エコファーマーの育成や農業振興を目的にした“目標”「天大として農産物の地産地消」に関する実践例を挙げたのは、20名（項目数）だった。

また、天理大学は、畑で収穫した農産物や賞味期限1カ月前の食品を学内外から集め、それらを「フードバンク」へ提供する、あるいは、それらを貧困家庭の子どもへ直接提供する「子ども食堂」の開設など、食べ物の有効活用を促す意見があった。これらの活動は「他者への献身」の一環であり、教職員・学生が一緒になって実践することが望ましいという意見もあった。このような活動を促す、“目標”「子ども食堂・フードバンク」に関する回答者は16名（項目数）だった。

天理大学の「建学の精神」の一つである「宗教性」との関連では、「物を大切にす」、「菜の葉1枚でも無駄にしない」、「皺紙も伸ばして使う」など、天理教の教理との関連性を考え、協働して実践する“目標”「天理教との協働・実践」を提言する回答者は33名（項目数）だった。特に「天理大学よふばく会」などとの協働を強く促す意見もあった。

以上、今年度、期末テストの設問として出題した「SDGs」に係る回答は全部で673項目数で、そのうち17目標に関する回答は504項目数、天理大学の「建学の精神」に則った独自の回答は169項目数だった。このように、回答項目数の約25%（169項目数）が「建学の精神」を根底に置いた回答だったことは、予想外だった。また、「国際参加プロジェクト」や「天理スピリット」についての関心も高く、天理教教理との関係性についても高い関心があることが示された。この三つの“目標”で全体の71%を占めたことにも驚いた。（つづく）



## 第5講：71 「あの雨の中を」

## 1. はじめに

この逸話は、教祖にお目通りいただき、不思議なご守護を頂いた井筒梅治郎の信仰の元一日を記したものである。教祖伝、天理教史のなかでは、井筒梅治郎といえば芦津の初代、「お手の真明講」、かんろだいの石出しふしん、水のさづけ、遠隔地布教の先駆、といったさまざまなエピソードで登場するが、今回はこの逸話を、むしろ今日的な信仰・布教という問題意識から捉えてみた。

## 2. 教祖の現前性／身体性と包摂性

講演では、この逸話のうち、「早速、教祖にお目通りさせて頂くと」という文言から教祖の「現前性」について、「たねの頭を撫でて下さった」という描写から教祖の「身体性」について、また「あの雨の中を、よう来なさった」というお言葉から教祖の「包摂性」について、それぞれ照射した。教祖の現前性と身体性は、教祖御在世当時の先人には可能であったものの、今日の私たちにはもはや不可能なものである。一方、包摂性については、私たちようぼくによって今なお具現化可能なものである。包摂性の具現化を通して、私たちが教祖の現前性・身体性を喚起する、あるいは“映していく”こと一少なくともそれを理想とすること一は、ようぼくとしてひながたを通ることの理想としてあり得るのではないだろうか。

## 3. 真明組からみる井筒梅治郎の信仰

「梅治郎の信仰は、この、教祖にお目にかかった感激とふしぎなたすけから、激しく燃え上がり、ただ<sup>ひとすべ</sup>一条に、にをいかけ・おたすけへと進んでいった」と語られる、梅治郎の信仰の揺ぎなさとしなやかさは、「本田寄所」に集ういわば“商人的”人間関係を核とする信仰共同体のなかで醸成されていった。真明組は明心組（後の船場大教会）と共に、都会で名称の理を受けた最初の講である。天理教伝道史では、大阪（河内・摂津）と大和との比較において、大和が農業中心で保守的であるのに対し、大阪は商業中心で進歩的であると言われる。「本教がまだ大和だけの時分の信仰はじっくりとしていた。それが一度河内大阪へ流れ込むと、倒れていた草木が一ぺんに立ち上がり、生き生きと動き出したという感じがする」（高野友治『御存命の頃』、286）という描写は、梅治郎と真明組における信仰の躍動感をよく伝えている。

特にその布教の躍進を支えたのは、徹底したおてふりの実践であった。真明組が「お手の講社」と呼ばれる<sup>ゆえん</sup>所以である。この点について、高野友治は次のように述べている。

当時本田の寄所には三十人、五十人と信者が参拝し、太鼓をたたいておつとめを行い、おてふりを踊った。あまり皆が熱心で暁が三ヶ月に一ぺんづつ表替えをしなければならぬほどすりへってしまった。それからまた夜おそくまでどんちゃんやるので、近所の人々が安眠妨害だと怒り出し、やむなく国津橋の橋の上へ出て、夜明けまでをてふりの稽古をしておったという。（高野友治『天理教傳道史Ⅰ』、83）

これほどまでの集団としての信仰の盛り上がりは、当時の大和ではお屋敷を除いては見られない。これは、商人としての人間関係・信頼関係がそのベースにあったからこそ可能になったのでは

ないか、というのが本発表の論点である。つまりそれは、真明組におけるこうした白熱の信仰の展開は、ある種の人間関係における信頼によって支えられていたのではないか、という見方である。この関係性をより強固なものにしたのが、“共におどる”というおてふりの徹底した実践であったように思われる。

## 4. “商人的”人間関係とおたすけ

“商人的”人間関係とおたすけについて、次のような記録がある。

当時おたすけ人といっても、皆それぞれ商売をし、仕事をもっている一家の主が多かった。いうまでもなく井筒講元の家は萬綿商であり、中川講脇の家は紺屋であり、その他……藍に関係した商人が多く、商売屋の主人であった。それがおたすけに歩き廻っていて、時には突然一日も二日も三日も家を空けて帰って来ない。留守の者は困ってしまい、尋ねてみると、どこそこの病人のおたすけに行っているという。早く帰ってくるように使いを出すと、

「今、人一人たすかるか、たすからぬかの瀬戸際だ。商売などあと廻しや。」

と追い返すのが常であった。（『真明芦津の道 復刻版』、90）

だが、そもそも、利益を最大目的とする商売と、利益を度外視するおたすけは、常識的に考えればまったく対照的な行動原理によって支えられているものである。この矛盾するように見える両者を繋いだものとは何だったのだろうか。

その鍵は、「165 高う買うて」の逸話に探ることが出来る。この逸話では、真明組から入信した宮田善蔵が、お屋敷で教祖から頂いた、「商売人はなあ、高う買うて、安う売るのがやで。」というお言葉の意味についての、梅治郎のさとり方が肝となっている。梅治郎は、「神様の仰っしゃるのは、他よりも高う仕入れて問屋を喜ばせ、安う売って顧客を喜ばせ、自分は薄口銭に満足して通るのが商売の道や、と、論されたのや」と善蔵を論している。このさとりは、商売の道理と人だすけの道理は矛盾しないというものである。ここでは、商人としての信頼関係と、信仰的な信頼関係が一つのものとして捉えられている。梅治郎の信仰的情熱は、教祖から与えられたこうしたさとりによって支えられていたように思われる。

## 5. おわりに

井筒梅治郎の信仰は、教祖の現前性／身体性および包摂性によって可能となったいわば“絶対的信頼”に基づくものであったと言える。また、梅治郎と真明組の人々との信頼関係のあり方は、彼らの信仰の持続を可能にするものであった。

梅治郎をおたすけへと駆り立てた教祖の現前性／身体性を、今日私たちが体験することは不可能である。だが、今日における信仰のあり方として、一商人に非ずとも一より豊かな信頼関係の醸成を通して、信仰を共有していくことは可能であろう。ひいてはそれは、私たち自身が包摂性を具現化していくことによって、教祖の現前性／身体性を“映す”、あるいは“喚起すること”に繋がるのではないだろうか。それは、今日私たちが、ようぼくとしてひながたを通ることの意義であるように思われる。

天理ジェンダー・女性学研究室・関西環境教育学会共催  
ワークショップ報告

「SDGs に向けて—エコフェミニズムの意義」

金子珠理

「天理ジェンダー・女性学研究室」では、2002年に国際シンポジウム「エコフェミニズムの可能性」を開催するなど、エコフェミニズムについて研究を重ねてきた。このような経緯から、10月20日、研究所会議室において、関西環境教育学会との共催形式で、ワークショップを行った。「SDGs に向けて—エコフェミニズムの意義」と題し、金子珠理が招待講演を行った後、所員も討議に加わり、同学会会員とともに活発な意見交換が行われた。以下に、講演内容の概要を記す。

SDGsの「目標5：ジェンダー平等」をめぐるのは、日本では不可解な認定ケースが目につく中、本来の「目標5」の意義を、5.4、5.5、5.6に焦点を絞りつつ、エコフェミニズムと関連させて確認したい。

日本では、環境保護運動と女性運動が連動してこなかったように思われる。「母として」「子のために」安全な食べ物を、と訴える女性たちの運動は、フェミニズムからはしばしば母性主義として批判されてきた。しかし、環境（自然）の支配の原理と、女性の支配の原理とが、実は同根であることを一貫して示してきたのが、エコフェミニズムの運動と理論である。

1975年から5年おきに開催されてきた、世界女性会議のテーマは「平等・開発・平和」であるが、日本を含む先進国では、「開発」への関心は低い傾向にあった。国際会議の場で、エコフェミニズムが登場するのは、1980年の第2回世界女性会議（コペンハーゲン）のNGOフォーラムにおける「エコフェミ宣言」である。女性と自然と第三世界の搾取によって成立している、近代産業社会の矛盾と生態系の危機が訴えられた。1992年の、環境と開発に関する国連会議（地球サミット、リオデジャネイロ）の前年に開かれた、健康な地球のための世界女性会議（マイアミ会議、1991年）は注目に値する。女性やジェンダーの視点の重要性を主張する「女性のアクションアジェンダ21」が、翌年、サミットの「アジェンダ21」第24章に反映されたといわれる。

目標5.6と関連する、最も重要な会議は、1994年の国際人口・開発会議（カイロ）と、1995年の北京女性会議であろう。これらを通じてリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康及び権利、略称リプロ）概念が定着していく。

日本においては、1980年代の女性原理をめぐる「エコフェミ論争」（青木やよひ vs 上野千鶴子）以降、エコフェミニズムを語る事が憚れるような雰囲気が続いたが（失われた10年）、これらの会議以降、エコフェミニズムが見直されることとなった。リオの地球サミットから20年後の「リオ+20」（1992年）やMDG（ミレニアム開発目標）では、リプロの視点が後退したと指摘されているが、SDGsにおいて、ようやくリプロの視点が明確になった。リプロの問題こそは、エコフェミニズムにとっての最重要の問題の一つであり続けてきたのである。それはなぜだろうか。

フェミニズムの中であって、エコフェミニズムは、近代批判、

テクノロジー批判がとりわけ強いという特徴を持つ。エコフェミニズムでは当初から、環境（自然）と女性の接点として「人口問題」を重要視し、女性の身体を舞台とした、テクノロジーを用いた人口政策を批判してきた。それは、（新）マルサス主義の「人口増加がもたらす貧困」説に基づき、非人道的な生殖テクノロジーによって、途上国の女性の生殖をコントロールし、人口抑制を図ろうとする政策である。実際は、先進国が途上国の環境を破壊することにより貧困は生じるのであるが、その真実は覆い隠されてきた。北の女性は逆に産ませられる方向性に置かれており、南北で女性の分断も見られるが、女性をターゲットにしている点では共通性もある。ピルの人体実験がプエルトリコで行われたことから分かるように、これらの「人口」や「生殖テクノロジー」の問題には、ジェンダー格差のみならず南北格差や開発の問題がかかわっていることを、エコフェミニズムは見逃さなかった。

目標5.4が、いわゆる先進国の主婦の問題にとどまらないことを示したのが、ドイツ系エコフェミニスト（マリア・ミース、C・V・ヴェールホフ、V・B＝トムゼン）による、フェミニスト世界システム論（サブシステム・パースペクティブ）である。ミースは、I・ウォーラステインの世界システム論に、さらにジェンダーの視点を加え、「主婦化」概念を創出した。「主婦化」とは、「人々（特に女性）を主婦とみなすことで、その人がおこなっている労働の価値を引き下げ、その人々の社会的地位を従属的なものへと転落させてしまうメカニズムを意味し」、先進国の男女にも広がりを見せている。

現在の日本では、新型出生前診断テクノロジーによって胎児の選別が容易になりつつあるが、それは新たな苦悩をも男女にもたらしている。近年、少子化対策は、両立支援から出産奨励へと変質し、高校保健体育の啓発教材『健康な生活を送るために』（2015年度版）においては、「卵子の老化」言説がまことしやかに囁かれる。「女性の健康の包括的支援に関する法案」は、「産め産め」法ではないかとの指摘もある。その結果、教育現場ではリプロなどを含む性教育の後退（萎縮）がみられるが、今後、環境教育を通して、ジェンダー平等が伝えられることに期待したい。これらの根本となるのが、目標5.5に示されているような、（学校教育を含む）あらゆる意思決定の場における、完全かつ効果的な女性の参画および平等なリーダーシップであることは、言うまでもない。



天理参考館前にて

日本宗教学会第 78 回学術大会で発表

堀内みどり

標記大会が、9月13～15日にわたり、帝京科学大学（千住キャンパス）を会場に開催された。13日午後に行われた公開シンポジウムは「宗教と科学の新たな世界」をテーマに、石黒浩・大阪大学大学院基礎工学研究科教授が基調講演を行った。石黒教授は、社会で活動するロボットの実現を目指し、知的システムの基礎的な研究を行い、インタラクションという日常活動型ロボットにおける課題を先駆的に提案。講演では、自らに関わって作成してきたヒューマノイドやアンドロイド、ジェミノイドなどを多くの映像で紹介しながら、それらの特長と今後の課題・方向性などについて述べた。これに対し、木村武史・筑波大学大学院教授と沖永宣司・帝京大学教授が、それぞれの立場からの意見を述べた。

14日・15日は、パネル発表と個人発表が13の部会に分かれて行われた。天理大学からの発表は以下の通り（発表順）。

澤井治郎：『ニューヨークタイムズ』にみるニーバーとグラハムの位置

岡田正彦：パネル「近代における暦・国家・宗教」（代表・司会）国民の祝祭日と仏教の忌日—『仏暦一斑』と『神宮暦』—

堀内みどり：夫婦再考—天理教の教えと「性」の多様性—

澤井真：パネル「イスラーム中世における神認識」（代表・司会）ジューの存在に自己顕現論におけるムハンマドとアダム

澤井義次：パネル「宗教研究における井筒『東洋哲学』とその展開（代表・司会）井筒俊彦の哲学的意味論とシヤンカラの哲学

第 325 回研究報告会（9月18日）

20 世紀における北太平洋地域のスピリチュアル・セラピーとしてのレイキ

ジャスティン・スタイン

（日本学術振興会海外特別研究員・佛教大学）

9月の研究報告会において、「レイキ」あるいは、「白井霊気療法」と呼ばれるスピリチュアル・セラピーの展開について研究報告した。本発表の内容は、『近現代民間精神療法』（国書刊行会、2019年）のなかで発表者が分担執筆した内容に基づいている。

発表では日米の文化交流を考察しながら、レイキの発展が北太平洋地域という「インターシステム」でつくられたものであることを明らかにした。すなわち、北米地域からの影響を受けて日本において誕生した霊気療法は、この意味で、日本（東洋）と米国（西洋）を個別にではなく、一体として捉えることではじめて理解が可能となる。

レイキを創造するために、創始者である白井甕男（1865～1926）は、大正時代において密教や米国のメスメリズムや

ニューソートの実践を組み合わせた。その後、昭和初期に白井の弟子である林忠次郎（1880～1940）が、科学的な言説や人体の解剖学的な知識を取り入れた。さらに林の弟子で、ハワイ生まれの高田ハワヨ（1900～1980）は、二世日系アメリカ人であったが、1930年代後半から1970年代に、白井霊気療法をハワイや北米に適応させることを試みた。上述したように、レイキの適応は西洋化を通して展開されたが、その一方で、アメリカ人に「日本文化」の要素を翻訳するべく、高田は新たな実践を取り入れた。そのため、アメリカにおいて、レイキを日本化したと言えることができる。したがって、日本においてもアメリカにおいても、レイキとは日米の複合物であり、その文化圏は国境によって別個に分離できるものではない。

質疑応答では、「インターシステム」論や、1970年前後に広がったヒッピーとの影響関係、レイキの霊授という伝授式の受け方、さらに遠隔療法などについての質疑応答があった。

「東アジア人文社会科学の新天地」シンポジウムに参加

金子 昭

標記国際学術シンポジウムが10月4日・5日の2日間、台湾台北市の中国文化大学にて開催された。これは同大学に東アジア人文社会科学研究院（東亞人文社會科學研究院）が開設されるにあたり、その開設式典に合わせ、徐興慶学長の肝煎りで開催された大規模シンポジウムであった。

総合テーマ「東アジア人文社会学研究の新天地—人物・文化・思想・海洋・経済の合流—」の下、初日は開設式典に引き続き、基調講演も含めて16の研究発表、2日目は2会場に分かれて合わせて24の研究発表が行われた。台湾、中国、日本、韓国、ベトナム、アメリカのさまざまな分野の研究者により、東アジアについての人文社会学の諸研究の新しい総合と展開を目指すという野心的な試みで、使用言語も中国語、日本語、韓国語、英語で行われ、それぞれの発表にコメンテータがつくという充実した内容のものだった。

私は、2日目午前の「近現代東アジアの政治と秩序」のセッションで、「東アジアにおける平和共同体の可能性と宗教の役割—海洋という観点からみた東アジアの宗教的平和論—」という題目で発表。コメンテータは東アジア宗教社会科学研究院の副執行長を務める林孟蓉副教授が担当した。

EUと異なり、その構築が困難とされるのが東アジア共同体である。しかし、東アジア諸国を取り巻く海洋に着目して、これを現実の海のことだけでなくメタファーとしても捉えたときに、新たな観点が見えてくる。東アジアの宗教文化には、（1）宗教間対話や宗教間交流を通じて行われる、平和と和解を求める海流、また（2）グローバルに展開されるヒューマニスティックなボランティア活動の海流が流れている。私はその事例として、どちらも大乘仏教の流れを汲む日本の立正佼成会と台湾の慈濟基金会を取り上げ、両者がそれぞれの仕方で東アジアの平和共同体構築のために寄与する二大海流となっていることを報告した。

第 326 回研究報告会 (10 月 17 日)

「解決志向アプローチ」

金山元春

(天理大学総合教育研究センター・教授)

私の研究関心は現職教員や教員志望学生に「教育の役に立つカウンセリング」を伝えることにある。ここでいう「カウンセリング」とは、個人の病理を探り、それを治療しようとするものではない。学校現場とは、児童生徒の病理を発見し「治す」場ではなく、児童生徒の力を引き出し自ら課題を解決していけるように「育てる」場である。また、児童生徒に対する援助では、個人の内面のみに偏らず、個人と環境との相互作用にも焦点を当て、環境へも積極的に働きかけていく必要がある。この点で有用なのが「解決志向アプローチ」(Solution Focused Approach : SFA)である。SFAでは児童生徒がもつ力を内的リソース(自助資源)と呼び、これを最も尊重する。また、SFAでは児童生徒の生活環境における外的リソース(援助資源)を活かしたチーム援助を重視する。したがって、SFAは現職教員や教員志望学生が学ぶカウンセリング・アプローチとして最適なものと考えられる。研究報告会では、現職教員や教員志望学生を対象としたSFA研修に関する実践研究の成果(科研費・基盤研究(C)17K04870の助成を受けた研究の成果を含む)について発表した。

日本南アジア学会第 32 回全国大会に参加

堀内みどり

10月5～6日、慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された標記大会に参加した。堀内はパネル「越境するジェンダー暴力 ローカルからグローバルへ」やその他の個人発表に参加した。上記パネルでは、ジェンダー暴力とくに性暴力が、これまでの諸分野での研究により、単純に男性の「性欲」の問題ではなく、男性中心の家父長制に基づく女性支配・女性排除の暴力の一携帯とみなされているという見解を示し、パネルにおいては南アジアの文化的背景を考慮しつつ、グローバル化時代におけるジェンダー暴力やその周辺状況について考察された。発表ではインドへ出稼ぎにいったダリット、インドに移民してきたパンジャブ女性の越境経験、オスロのパキスタン系移民社会における「強制結婚」などが報告された。

教団付置研究所第 18 回年次大会に出席

標記大会が10月30日、立正佼成会法輪閣大ホールにて開催され、研究所から、堀内みどりと金子昭が出席した。これは、教団付置研究所懇話会が年に1回開催しているもので、懇話会は会員の19教団付置研究機関、オブザーバーの8研究機関で構成されている。

今回は18会員と8オブザーバーから99名が参加した。年次大会では、「『個』から『個』への進行の継承を考える一何を受け継ぎ、育み、伝えるかー」を大会テーマとし、4つの発題と質疑応答があった。昼食後の休憩時間に立正佼成会の施設・活動紹介があり、総会では、「宗教間対話研究部会」「生命倫理研究部会」「自死問題研究部会」「宗教と法律研究部会」および実行委員会報告があり、さらに、会則の新規追加・変更について説明と質疑があった。その後は、場所を立正佼成会第二団<sup>じきどう</sup>会館の食堂に移し、交流会が催された。(堀内記)

『グローバル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は1月号からとなっております。購読料については、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メールでお願い致します(お電話での申し込みはご遠慮下さい)。毎月の希望冊数と、氏名(フリガナも)、郵便番号、住所、電話、FAX、E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を送付致します。振込みを確認後、発送させていただきます。

なお、切手・現金でのお支払いはご遠慮くださいますようお願い致します。

送料(ヤマト運輸DM便)

全国一律167円(角2封筒、重さ1kg〔約20冊〕まで)

【例】毎月購読167円×12カ月＝2,004円

問い合わせ先:

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

天理大学 おやさと研究所「グローバル天理」編集部

FAX 0743-63-7255

E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローバル天理

第20巻 第12号 (通巻240号)

2019年(令和元年)12月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 永尾教昭

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan